

# 序

奈良国立文化財研究所において、平城宮跡の発掘調査を継続的に開始して以来、既に15年の歳月を数えるに至った。発掘面積は23万平方メートルに達し、数々の遺構遺物が検出され、宮跡の姿は年を逐うて明らかになりつつある。しかしながら、特別史跡の指定面積124万平方メートルに比べ発掘を了した面積はその二割弱に過ぎず、また発掘の進行について既知の事実についても新たな検討を要する問題も提起されつつあり、今後もさらに心を奮い起こし常に心を新たにして発掘調査に取り組む必要が痛感される。

思えばこの発掘調査に取りくんだころに比べ、調査の機構は充実し、発掘・記録・保存等の技術も一段と進歩した。担当者の努力もさることながら、この宮跡の持つ意義に対する大方の認識や関係の方々の力に負うところが大きい。さらにこの宮跡の発掘調査が全国の遺跡の調査に及ぼした有形無形の影響を考えるとき、その任務の重さを改めて感ぜずには居られない。

発掘調査の成果については、逐次年報などにより速報するほか、慎重な検討の結果を学報として公表することとし、これまで5冊の刊行を了し、ここに第6冊を刊行するはこびとなった。まだ刊行に至らぬ調査成果が相当残されており、今後鋭意続刊すべく努力をつづけている。

このたびの報告は、平城宮と表裏一体をなす平城京の地域に属するものである。平城宮の範囲が八町四方の正方形ではなく、東方に張り出し

ていたことが発掘調査の結果明らかとなり、かねて計画されていた国道24号線バイパスの位置を変更することになった。このため新しい道路予定地を事前に発掘調査した結果の報告であり、主として昭和44年に実施したものである。この道路変更の問題は平城宮跡はもとより各地の重要な遺跡の保存に大きな影響を及ぼしたものとして今なお記憶に新しいが、このたび報告書の刊行に当って当時の関係者の努力や遺跡保存のために犠牲をはらわれた各方面に対し、敬意の念新たなるをおぼえる。

この報告書をまとめるにあたって、平城宮跡発掘調査指導委員会の諸先生方をはじめ、石野博信、梅田敏見、江本義理、岡 邦祐、田辺昭三、檜崎彰一、山崎一雄、松田権六の諸先生に何かとお世話になった。ここに記して厚く御礼を申し述べる次第である。

昭和49年12月18日

奈良国立文化財研究所長

小川修三